

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

Data

監督：田壮壮（ティエン・チュアン
チュアン）

出演：呂麗萍（リュイ・リーピン）
／濮存昕（プー・ツンシン）
／李雪健（リー・シュエチ
エン）

青い凧

（藍風箏／Blue Kite）

1993年・中国映画・138分

配給／東光徳間

2004（平成16）年7月16日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

👁️👁️ みどころ

著名な映画俳優の両親をもつ田壮壮監督は、江青を中心とした「4人組」と文化大革命の文芸の分野における、大いなる犠牲者。そんな田壮壮監督が、自らの少年期の体験をもとに描いた、1953年から66年までの新生中国における政治闘争の中で翻弄される善意の人たちの姿。なぜ、この映画が中国で上映禁止とされているのかがよくわかる。時代背景を勉強しながら、文化大革命の無意味さを真剣に味わってもらいたい、第一級の問題作。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<田壮壮監督とはどんな人？>

田壮壮は陳凱歌（チェン・カイコー）、張藝謀（チャン・イーモウ）らと共に、1977年に終了した文化大革命の翌年の1978年に再開された北京電影学院に第1期生として入学し、1982年にこれを卒業後、北京映画製作所に配属され、『紅象』（82年）、『九月』（84年）、『狩り場の掟』（84年）、『盜馬賊』（85年）を次々と発表した監督。

私はそのうちで、『盜馬賊』だけ観たが、これはドキュメントタッチの映画で、はっきり言ってそれほど面白い映画ではなかった。田壮壮監督がすごいのは、その両親を含めた経歴。父親は有名な俳優・田方（ティエン・ファン）で、母親も有名な女優・于藍（ユイ・ラン）。田壮壮はこの2人の次男として1952年に生まれたが、この両親は文化大革命によって大変な悲劇に見舞われることになった。

<父・田方（ティエン・ファン）と母・于藍（ユイ・ラン）の軌跡>

于藍については、石子順著『中国映画の明星—女優篇』（2003年・平凡社）の中で、「戦火から生まれた映画女優—于藍」というタイトルで、100頁近くにわたって詳しく

解説されているので、その波乱に満ちたドラマティックな人生については、是非これを読んで味わってもらいたい。

于藍は1921年生まれ女優だが、新中国が建設された1949年から文化大革命直前の1965年までの17年間しかスクリーンに登場していない。1937年7月7日に発生した日本軍による盧溝橋事件（7・7事変）を契機として、本格的な日中戦争が始まったが、于藍は1938年から17歳で中国共産党の聖地である「延安」に入り、29歳の林彪が校長をつとめていた「抗日軍政大学」に入学した。そしてここでの文芸活動に参加したことが契機となって、はじめて舞台に立つことになった。そこで出会った運命の人が夫となる田方だ。

田方は1911年生まれ俳優で、1933年に映画デビューした後、いくつもの作品に出演して大スターとなり、于藍と同じ1938年に延安に入り、于藍と同じ抗日軍政大学で学んでいた。この田方と于藍は、1949年11月7日、「ロシア革命記念日」の日に、田方が29歳、于藍が19歳で結婚した。そして1949年の新中国建国後、「田方は新しい国作りのなかでの新しい映画経営者を、于藍は新しい国の新しい女優をめざした」（86頁）ということだ。2人はそれぞれ新中国のための活動を続け、長男新新、次男壮壮という2人の男の子にも恵まれた。

<「13年を大いに描け」の波紋>

1966年に始まった「文化大革命」に先立って、上海では、1963年1月の文芸工作者会議で上海市長柯慶施が、「13年を大いに描け」というスローガンを発表した。これはそのタイトルどおり、1949年の新中国建国から今日までの13年間の社会主義時代の生活を描くことこそが社会主義文芸であり、それ以外はありえないというもので、極左文芸論の極みというべきもの。

1949年の新中国建国以降、于藍は『白衣戦士』（49年）、『林商店』（57年）、『ある母の回想（革命家庭）』（60年）等に出演し、有名女優に成長していった。そして1962年からはベストセラー小説『紅岩』を映画化した『烈火中永生（不屈の人々）』の撮影に入っていた。さらに1960年からは、大作『魯迅伝 上』に出演することが決まり、于藍は大なる期待をもって3年越しでその撮影に取り組んでいた。そんな中、1963年に起こったのが上記の「13年を大いに描け」というスローガンの発表だ。そしてこれによって、『魯迅伝 上』の撮影は葬り去られることになった。

<『不屈の人々』をめぐる江青の確執>

1935年生まれ石子順氏自身が、1953年まで中国東北部で過ごし、直接これらの人物や出来事のみつめてきただけに、この『中国映画の明星—女性篇』における石子順氏のこれらの描写は実に生々しくダイナミック。とりわけ、これに続く1964年12月

27日、毛沢東の夫人であり、あの文化大革命を指導し、後に「四人組」の1人として葬り去られた江青が、北京映画製作所に来て、『不屈の人々』を審査するという出来事の描写は圧巻。江青がこの『不屈の人々』を「反革命」とこき下ろしたのは、自分自身映画女優であった江青が、自らこの原作の『紅岩』を撮影したかったのに、それを横取りされたことの意趣返しであったとのこと。したがって、田方や于藍の身の上には、文化大革命の嵐の他に、この江青のうらみつらみが重なることになったわけだ。その結果、『鲁迅伝 上』は幻の映画となって完成せず、于藍は1965年を最後に映画への出演作はなくなったばかりか、田方、于藍一家は1966年以降、文化大革命の悲劇に見舞われることになったということだ。

<田方と于藍を襲った文化大革命の嵐>

文化大革命が始まったのは1966年。すなわち田壮壮が14歳の中学生の時、紅衛兵が突然撮影所の住宅に乱入したことにより、状況は一変した。その結果、田方も于藍も「隔離審査」を受けて、収容所に押し込められることになった。1938年に延安で出会った2人が結婚したのは、文芸・演劇活動を通じた革命闘争を闘う過程でのことだった。そして1945年に日中戦争が終結し、1949年に新中国が建国された後も、2人は「革命戦士」として新中国の映画のために働き続けてきた。田方が北京映画製作所の初代所長に任命されたのも、田方のそんな功績によるものだったはず。ところが文化大革命によって、田方も于藍も紅衛兵たちに取り囲まれ、土下座させられ、糾弾のスローガンやどぎつい罵詈雑言の嵐にさらされることになった。北京映画製作所で製作された1963年の『早春二月』という映画が、「毒草映画」だとして、批判のターゲットにされたことを手始めとして、北京映画製作所には1965年6月壁新聞が貼り出され、田方や于藍を含む数百人の人々が自己批判の嵐に見舞われた。中国共産党中央委員会の「文化大革命」に関する決定が可決されたのは、1966年8月8日。これを受けて北京映画製作所にも、紅衛兵が殺到し、田方や于藍たちは次々とつるし上げられることに……。江青を中心とした四人組の支配下におかれた北京映画製作所において、田方は、反革命分子の烙印を押された約500名の中の1人としてつるし上げられ、迫害、暴行が繰り返された。そして隔離審査や強制労働が続く中、田方はガンを患い、遂に1974年8月27日に死亡するに至った。他方、1972年、強制収容所において発生した作業中の事故によって、于藍の顔面の神経にはマヒが……。この事故によって、于藍の女優生命は完全に断たれ、1965年以降于藍がスクリーン上へ登場することは、2度となかった。

<于藍の復活と田壮壮監督の登場>

1966年に始まった文化大革命は、1977年終わりを告げた。そして文化大革命の迫害を耐え抜いた人々は、1980年10月、中国文学芸術工作者第4回代表大会を開き、

于藍はその代議員の1人として出席。さらに、翌1981年には、「北京児童映画製作所」が立ちあがり、于藍はその初代所長に任命された。

他方、次男の田壮壮は、17歳の1969年に吉林省の奥地の農村に下放されていたが、1975年に復員して、1978年に陳凱歌、張藝謀らと共に再開された北京電影学院の監督科に30歳で入学することに。そして1982年に卒業するや、たちまち監督としての活動を開始した。

<1996年8月、長春>

1996年8月、長春で「長春映画製作所創立五十周年記念祭」が開催された。この長春映画製作所創立五十周年記念祭についての、石子順氏の描写（98～102頁）は、自分自身がこの映画祭に参加して、そこで于藍らと対談したもののだけに、臨場感にあふれている。たとえば「市内の目抜き通りには映画祭ポスターや横断幕が飾られ、夜になると市内各所で屋外映画上映会が開かれた。長春市内は映画一色で染まって、これがまた長春市全体で長春映画五十年を祝ってくれているようにも見えた」（98頁）という記述を読めば、長春の様子が目に浮かぶようだ。石子順氏の于藍に関するこの論稿は、この長春映画祭で「いつかこの人のことを書こうと思ってしっかり握手」（102頁）した結果、生まれたもの。約100頁に及ぶ、すばらしい石子順氏の「戦火から生まれた映画女優—于藍」の解説に拍手を送りたい。

<『青い罌』は田壮壮監督の代表的話題作！>

この『青い罌』は、田壮壮監督の代表的な話題作で、1993年の東京国際映画祭でグランプリと最優秀主演女優賞を獲得し、1994年に日本で公開されたが、中国国内では2003年現在いまだに上映禁止のままとなっている作品。田壮壮監督は、この作品以降監督することができず、陳凱歌監督や張藝謀監督に大きく遅れをとっていたが、『春の惑い（小城之春）』（02年）を発表して、その存在感をアピールした。この『青い罌』は、1953年のスターリンの死亡から始まって、1966年の文化大革命直前までの激動する中国の政治状況の中、3人の男に嫁ぐことになった母親樹娟（シューチュアン）（呂麗萍／リュイ・リーピン）の姿をその子供大雨の視線で描くものだが、その中には田壮壮監督自身の体験が色濃く反映されている。

<どこかで見た女主人公の呂麗萍>

この『青い罌』の主演女優を観ながら、どこかで見た顔だと思っていたが、やっと思い出した。呂麗萍は、この映画で1993年の東京国際映画祭で最優秀主演女優賞を獲得したが、彼女は呉天明監督の『古井戸』（87年）で、俳優として登場した張藝謀（チャン・イーモウ）と結婚する子持ちの女性、段喜鳳の役で出演していた女優。私はこの『古井戸』

の映画評論の中で、もう1人登場する女優の梁玉瑾（リヤン・ユイチン）もかわいいが、この段喜鳳に扮する呂麗萍も「市毛良枝に似た顔立ちで、結構美人」と書いた。この『青い罌』に主役として登場した呂麗萍の姿を観て、あらためて、私の女優に対する観察眼の確かさ（？）を確信！

呂麗萍はこの映画でも、最初の結婚後、すぐに子供が産まれたものの、夫が強制労働に連れて行かれて死亡したため、子連れで再婚、再々婚をするという、『古井戸』と同じようなイメージの役柄を熱演している。私が知らないだけかもしれないが、市毛良枝によく似た美人なのだから、一作ぐらいはヒロインとして、その美貌をみせつける作品があってもいいのではないかと思うのだが・・・。

<主人公の樹娟は女教師>

樹娟が住んでいるのは、枯れた井戸があるため、乾井（かんせい）と呼ばれているまち。ごく平凡な中国風の胡同（フートン）の中で、樹娟は母と姉、弟たちと同居して生活している。樹娟の仕事は、小学校の教師。映画は、この樹娟が図書館で働く共産党員の少竜（シャオロン）（濮存昕／プー・ツンシン）と結婚するところから始まる。結婚式の日であった1953年3月5日ソ連の指導者スターリンが死亡したというニュースが流れてきたため、結婚式は少し延期され、ボクの誕生もその分だけ遅れることに・・・。

この映画の進行役はこのボク。つまりボクの語りによってこの物語は進行していくわけだが、ボクとは、2人が結婚した翌1954年に生まれた大雨のこと。大雨の日に生まれたから「大雨」と名づけられたが、おばさんたちはボクのことを鉄頭と読んでいる。その理由は・・・？

この映画の田壮壮監督は1952年生まれだから、ボクの生まれた年と大体同じ。このことからわかるように、ボクの語りは本当は、田壮壮監督自身の語りなんだ。

<樹娟の家族たちはどんな人？>

樹娟の姉はかなり熱心な共産党員の様子。そして、少竜も共産党員。だから、樹娟の弟や少竜、そしてその仲間の李（李雪健／リー・シュエチエン）たちは、よく政治談議（？）をしていた。また大雨の叔父さんは空軍将校で、大雨から見ればすごくカッコいい人だし、その恋人の朱（王央）はすごい美人。このように樹娟の家族やその周りの人たちは、1949年の新中国の建国後、それぞれの持ち場で、それぞれの仕事をきちんとこなしているようにみえたのだが・・・。

<整風運動とは？>

整風運動とは、1966年から始まる文化大革命に先立って、毛沢東が1957年から提唱した「百家斉放・百家争鳴」運動のこと。これによって中国では、日本にはなじみの

うすい、政治闘争、階級闘争、反右派闘争などの言葉が日常生活で飛び交う毎日となった。整風運動にもなって出された、「共産党活動についての批判があれば出せ」という言葉につられて、批判を出すと、それが本当の共産党批判だとみなされて、右派のレッテルをはられる危険も・・・？毎日毎日、職場で、地域の集会で「政治闘争」が展開され、その都度、誰かが右派に祭りあげられていくというありさまだ。そんな中、ちょっとした不用意な発言がアダとなって、少竜にもいつしか右派のレッテルが……。その結果、少竜は強制労働送りの羽目に……。また、最近目の調子がおかしいと訴えていた叔父さんも、その立場がやばそう。そのうえ、その恋人の朱〔王央〕は、女優の道で引き立ててやっているのに、上官の指示に従わないのは重大な思想的欠陥があると指弾されて、ついには逮捕。また樹娟の弟も同様で、樹娟の一家は悲惨な状態に。もともと、共産党思想を「堅持」する姉だけは大丈夫だったが、この姉も文化大革命の段階に入るとやはり……。何とも理不尽な政治闘争であり 整風運動だが、田壮壮監督が、この映画で訴えている、この理不尽さは自らが体験した事実であるだけに、その悲しみが深く心に迫ってくる。

<密告したのは誰？>

強制労働に連れ去られた少竜から手紙がきた。それを喜んだのも束の間、それは少竜の死亡を告げるものだった。その原因は、強制労働従事中の伐採事故による即死。そして、その遺体すらも家族に届かない状態。何ともあわれなものだ。悲しみにくれないながらも、健気に大雨を女手一つで育てながら懸命に生きている樹娟を、何かと手助けしたのは少竜の仲間だった李。しかし、実はこの李こそが、少竜や弟たちが右派だと密告した張本人だった。しかし李は今、自分のこの行動を心から反省し、何とか樹娟たち母子の役に立ちたいと願っており、それだけが李の生きがいとなっていた。そして、今はその思いがエスカレートして……。

ここらあたりの2人の心の葛藤や心理描写については、田壮壮監督は意外にアッサリと描いている。2人の気持が本音でぶつかりあい、「もう2度と家に来ないで！」と叫ぶ樹娟と、「ボクの本当の気持を君はわかってくれているはずだ」と静かに述べる李。そんな修羅場(?)のシーンが終わると、その次は結婚式のシーンだ。

これによって、やっとボクもお母さんも安定した生活を続けることができたら、前から時々身体の調子が悪いと言っていた李叔父さんは、お正月を迎えて、家族や近所みんなが餃子をつくって祝っている時、急に倒れこんだ。そしてしばらく入院した後、あっという間に、あの世の人に……。

<3度目の結婚は？>

その後、ボクは成長して十代となった。少し大人になりかけたこともあって、今は反抗期(?)。そんな中、お母さんはボクの将来のためと称して、今度はお姉さんの延安時代の

戦友で、今は文化部門で共産党の幹部となっているオッチャン、老兵と3度目の結婚をすることになった。3人目のお父さんの家は立派だし、お金持ちだが、ボクはこのオッチャンがキライで、これに反抗する毎日。お母さんはその間に立って、毎日大変だ。それ位はボクだってわかっている・・・。

ある日、お父さんの弟夫婦が家を訪れてきたので、僕はその子供と青い凧をあげて一緒に遊んでやった。そんなこともあって、今はお母さんはお父さんを愛しているようだし、ボクも少しは気持の整理がついてきた感じ。このまま時が流れていけば、自然にいい関係になれるのかも・・・。

<紅衛兵の登場と文化大革命>

ところが1966年から始まる文化大革命の嵐の前兆が、このまちにも登場した。ボクの行っている小学校の校長先生を反革命分子、反動分子としてこきおろす紅衛兵たちと一緒にあって、ボクたちもスローガンを叫び、拳をつき上げ、校長先生にツバをふきかけてやった。ところが、これをお母さんに報告すると、お母さんは「バカ！」と言って、ボクのほっぺをひっぱたいた。どうしてなんだろう・・・？

こんな状況の中、最近、お父さんは元気がない。そして今日は、お母さんとボクを呼んで、話があるとのこと。その話とは・・・？紅衛兵が近々この家にもやってくる。そこでお母さんやボクたちに迷惑をかけないため、離婚するというもの。それに従って、仕方なく離婚し、また実家に帰ったお母さんとボク。このところずっと続いている不幸の連続に、おばあちゃんは「もう私は生きていたくない」と嘆いていたけど、不幸はそれだけで終わらず、もっと続くことに・・・。それは・・・？

<遂に老兵の家にも紅衛兵が・・・>

いよいよ紅衛兵が、老兵の家に来た。こづきまわされながら、連行されようとした老兵だが、心臓を患っている彼は、その場に倒れこんだ。紅衛兵たちはこれをタンカにのせて運ぼうとするが、医者に見せようとするわけでもなく、その扱いは手荒いもの。そこに駆けつけたお母さんは、「この人は心臓病だ。医者に見せてくれ！」と訴えるが、紅衛兵たちは全然聞く耳をもたない。そればかりか、途中から「この女は老兵の嫁だ！」となり、お母さんまでが連行されそうに・・・。お母さんはそれに抵抗するけれど、所詮無理。お母さんからつばを吐きかけられた紅衛兵は、怒ってお母さんに対して暴力も・・・。ボクはまだ、小学生だが、男の子だからそれなりの力も持っている。そこでボクは、道端にあった大きな石をつかんで、1人の紅衛兵の頭を後ろからこの石でなぐりつけてやった・・・。しかし、その結果は・・・？

<この理不尽さはいったい何！>

ボクは紅衛兵から痛めつけられて、血だらけで寝そべっていたが、気がつくと、木の枝にひっかかったボクの青い凧が破れたまま哀れな姿をさらしている。血まみれになって倒れこみ、起きあがることができないボクもきっと、この青い凧と同じようなものだ・・・。

そして、お母さんは？お母さんは反革命分子と認定されて強制労働に送られることになってしまった。「2人で生活できればいいの・・・」といつも言っていたお母さんとも別れて、これからはボクは一人暮らしだ。どうしてこんな理不尽なことになるのだろう！それが、ボクにわかったのは、ボクがずっと成長した後のことだった・・・。

＜印象的なタイトルと印象的な音楽＞

『青い凧』とは、文字どおり空に上げる凧のことで青色をしている。この青い凧が自由に天高く舞っている姿はホントにカッコいいし、またこれをあげている人たちも幸せいっぱい。しかしこれが、いったん、木の枝にひっかかってしまうと、誰もこれを助けることができず、ただ惨めな姿をさらすだけ。そんな青い凧の姿と、新中国建国後の樹娟や大雨たち、そしてその家族たちそれぞれの姿は・・・？

こんな『青い凧』をそのままタイトルにしたのは、田壮壮監督のセンス。もう1つ印象的なのが、節目節目で静かに流れてくる音楽の美しさ。単純なメロディで、静かに流れてくるだけだが、この音楽は樹娟や大雨の身の上に次々と襲ってくる不幸を深く強く印象づける効果をもち、この映画の価値をグッと高めている。こんな名作をじっくり鑑賞することができた、シネ・ヌーヴォの「中国映画の全貌2004」に感謝！

2004（平成16）年7月17日記